

婦人科領域における 6315-S (Flomoxef) の臨床的効果

村田 誠・竹内 讓・関 晴夫・真木正博

秋田大学産婦人科教室

注射用オキサセフェム系抗生物質 6315-S (Flomoxef) につき、塩野義製薬より提供を受け、産婦人科性器感染症に対する臨床効果を検討した。すなわち付属器炎 2 例、子宮溜膿腫 1 例の計 3 例を対象とし、6315-S を生理食塩水 100 ml に溶解し、約 1 時間で点滴静注を行ない、その臨床効果、副作用などについて検討した。投与量は、症例の重症度に応じ、1 日 2 g から 4 g とした。

臨床的効果は、3 例とも有効であり、細菌学的には、子宮溜膿腫の 1 例で陰性化を認めたが、他の 2 例は、原因菌の同定ができなかった。自覚的副作用は、いずれにも認められなかったが、臨床検査値で、1 例でのみ GOT が極く軽度上昇を示した。

以上より本剤は、婦人科性器感染症に有用であると考えられた。

6315-S (Flomoxef: FMOX) は、塩野義製薬で合成された新しいオキサセフェム系抗生物質で、LMOX と同一の 1-オキサセフェム骨格を有し、グラム陰性菌と嫌気性菌への強い抗菌力を保持しながら、多くの第三世代抗生物質の欠点であるグラム陽性菌への弱い抗菌力と Disulfiram 様作用を改良した抗生物質である¹⁾。今回、我々は、塩野義製薬より 6315-S の提供を受け、産婦人科性器感染症に対する臨床効果を検討する機会を得たので報告する。

I. 対象および方法

付属器炎 2 例、子宮溜膿腫 1 例の計 3 例を対象とし、6315-S を生理食塩水 100 ml に溶解し、約 1 時間で点滴静注を行なった。臨床効果の判定は、以下の基準に従って行なった。

著効：主要自覚症状が 3 日以内に著しく改善し治癒に至った場合

有効：主要自覚症状が 3 日以内に改善の傾向を示し、その後治癒した場合

無効：主要自覚症状が 3 日経過しても改善しない場合

なお、手術などの外科的療法を併用して著効であったものは、著効とはせず有効とみなした。

II. 結果

3 例のまとめを Table 1 に示す。以下、個々の症例につき簡単に報告する。

症例 1 T.S. 24 歳、臨床診断 右付属器炎、臨床経過 昭和 60 年 8 月 10 日、38.2°C の発熱と右下腹部痛、腰

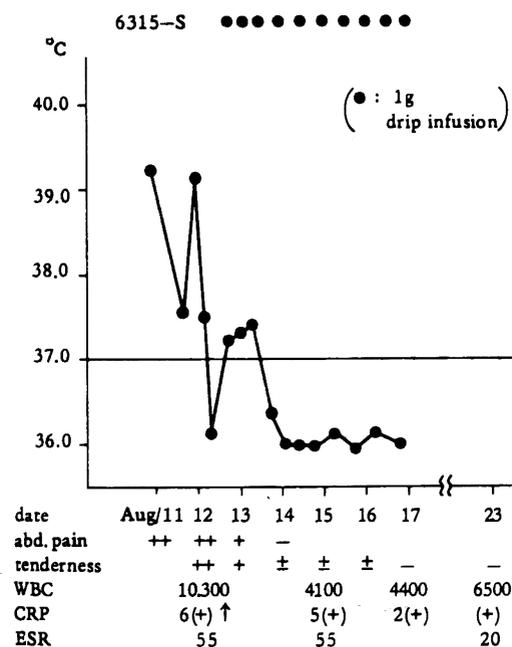
部倦怠感出現、翌日、39.4°C の発熱あり、自分でクーリングしたが下熱せず。当科関連病院を受診。内診所見では子宮は正常大であり、左付属器部も正常であったが、右付属器部の圧痛が著明であった。しかし、はっきりとした腫瘍形成は認められなかった。また、一般検査成績で白血球増加、赤沈の亢進、CRP の強陽性を認め、右付属器炎と診断し、即日入院となった。6315-S を 1 日 2 g 投与を行なったところ、速やかな下熱と臨床症状の改善をみたが、圧痛が投与 5 日目ぐらまで持続した。一方、検査成績で白血球数の減少が投与 4 日目で認められたが、血沈、CRP は投与 12 日目でも 1 時間値 20 mm, (+) であった。起因菌の同定は行ない得なかったが、臨床的には有効と判断した。投与開始後 3 日目に右前腕部に発疹を認めたが、皮膚科医にコンサルトしたところ、その部にだけ限局する薬物性の発疹は考え難いとのコメントであり、副作用とは考えず、そのまま投与を継続したところ、その 3 日後に消失した。臨床経過は Fig. 1 に図示した。

症例 2 M.F. 27 歳、臨床診断 左付属器炎、臨床経過 昭和 60 年 8 月 23 日、過多月経を主訴として当科受診。内診所見より子宮内膿症と診断し、ダナゾール療法を開始した。その後、8 月 31 日に発熱、下腹部痛出現し、左付属器炎の診断で、当科入院となった。入院後、CEZ, CTZ, AMK, SB-PC の抗生剤を投与したが、いずれも無効で 38~39°C の発熱を認めた。9 月 9 日に 6315-S に変更し、同日、開腹手術を行なった。手術所見で、右付属器はチョコレート嚢腫であったが、左卵巣は膿瘍を形成し、卵管をまきこんで強度な炎症状態を呈していた。一塊としての左付属器を摘出する際、カプセ

Table 1 Clinical summary treated with 6315-S

Case	Year	Diagnosis	Total dose	Organisms	Clinical effect	Side effect
1	24	rt. adnexitis	10 g	Unknown	Good	(-)
2	27	lt. adnexitis	26 g	Not detected	Good	(-)
3	56	pyometra	16 g	<i>S. pneumoniae</i>	Good	GOT ↑ (slightly)

Fig. 1 Case 1 T. S. (24y) Rt. Adnexitis



ルを破り膿汁が腹腔内に流出したため、ダグラス窩にドレーンを挿入した。術後の腹膜炎併発の恐れがあるため 6315-S を 1 日 4 g 投与した。術後 3 日目に平熱に復し、白血球も 5 日目には正常化した。CRP も 9 日目には (±) と正常化した。血沈は改善傾向を認めたものの高値を維持した。細菌学的には手術標本より膿汁を採取し、その培養を行なったが起因菌は検出されず、また、経過中、ダグラスドレーンからの吸引物の培養も行なったが細菌は検出できなかった。経過図は Fig. 2 に示すが、臨床的には有効と考えられた。また、総量 26 g の投与におよんだが、副作用は認められず、本剤と関連する臨

床検査値異常も認められなかった。

症例 3 T. S. 56 歳。臨床診断 子宮瘤膿腫、臨床経過 昭和 60 年 9 月 28 日より発熱、下腹痛あり。9 月 30 日、某内科を受診し、膀胱炎の診断で投薬を受けたが改善せず。また、膿性帯下が出現したため、10 月 3 日、当科を受診した。内診で、子宮は超鶏卵大で圧痛を認め、吸引細胞診用嘴管を挿入したところ膿汁が流出した。子宮瘤膿腫と診断し 6315-S の投与を行なった。また、子宮腔内にドレーンを挿入した。投与 3 日目には平熱に復し、下腹痛も軽快したが膿汁流出は 5 日目まで軽度認められ、またドレーンを併用したことから臨床効果は有効と判定した。一般検査成績で、CRP は 5 日目も 6 (+) であったが、9 日目に (+) と改善を認めた。白血球は 5 日目に正常化し、9 日目に $11500/\text{mm}^3$ と再び増加したがその後の再検で $6700/\text{mm}^3$ であり、その原因は不明であった。一方、臨床検査成績で、投与前 12 IU/L であった GOT が、投与後に 43 IU/L と極めて軽度の上昇を示した。一応、40 IU/L 以上を異常値と設定しているため副作用としてとらえた。細菌学的には、入院後の子宮腔より得られた膿汁より *Streptococcus pneumoniae* が検出され、加療後は陰性化した。また、これら臨床経過のまとめは Fig. 3 に示した。

Ⅲ. 考 察

6315-S は LMOX がもつグラム陰性菌や嫌気性菌に対する強い抗菌力を保持しながらグラム陽性菌への抗菌力もあわせもつことから各科領域での感染症治療に期待される新しい抗生物質である。今回、我々は、起因菌の確立しない 2 例と、*S. pneumoniae* によると考えられた 1 例の産婦人科領域の感染症に本剤を投与してみたが、その臨床効果は期待に違わず、全例、有効と判断された。また、副作用、臨床検査値異常は 1 例のみ、ごく軽度の GOT の上昇を認めただけであり、非常に有

Fig. 2 Case 2 M. F. (27y) Lt. Adnexitis + Endometriosis

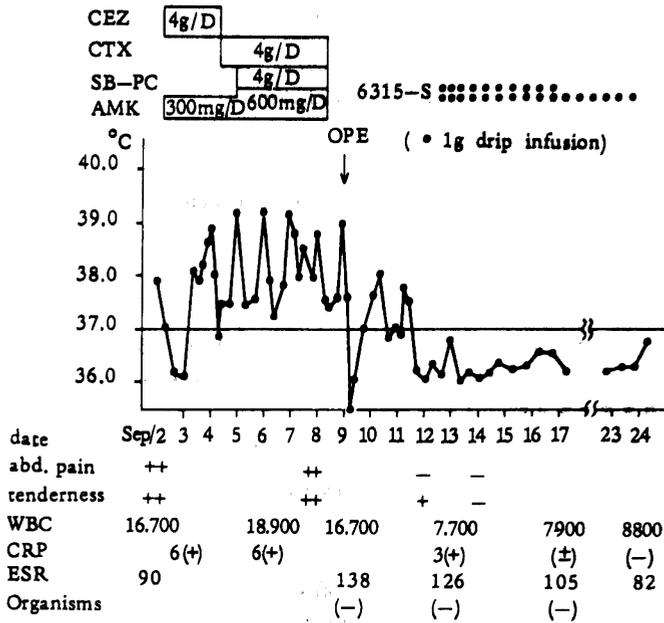
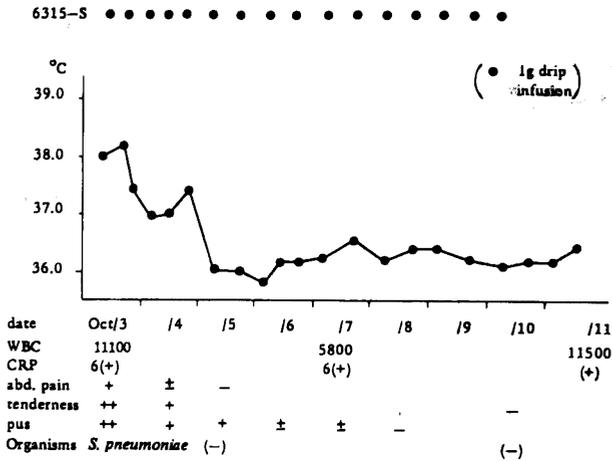


Fig. 3 Case 3 T. S. (56y) Pyometra



用な抗生物質であると考えられた。

文 献

- 1) 6315-S の概要。塩野義製薬株式会社

CLINICAL EFFECT OF 6315-S (FLOMOXEF) IN GYNECOLOGY

MAKOTO MURATA, YUZURU TAKEUCHI, HARUO SEKI
and MASAHIRO MAKI

Department of Obstetrics and Gynecology, Akita University School of Medicine

6315-S was administered to 2 patients with adnexitis and 1 with pyometra.

Clinical efficacy was good in all 3 cases. Bacteriological study revealed that *S. pneumoniae* was eradicated in the case of pyometra. In the same case, very slight elevation of GOT was observed as a side effect.